

<特集論文>京傳と国芳：『復讐曲輪達引』 成立考

白戸，満喜子 / シロト，マキコ

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

49

(開始ページ / Start Page)

14

(終了ページ / End Page)

23

(発行年 / Year)

1994-03-15

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019721>

京傳と国芳——『復讐曲輪達引』成立考——

白 戸 満 喜 子

飯島虚心が著した『浮世絵師歌川列伝』の歌川国芳の項に次のような記述がある。

「国芳は草双紙を画きたれど、三世豊国のごとく多からず、僅に二十餘種に過ぎざるなり。中に就き山東京傳、および五柳亭徳升の著作最もおほし。しかして続きものの双紙は、稗史水滸の一部あるのみ。」

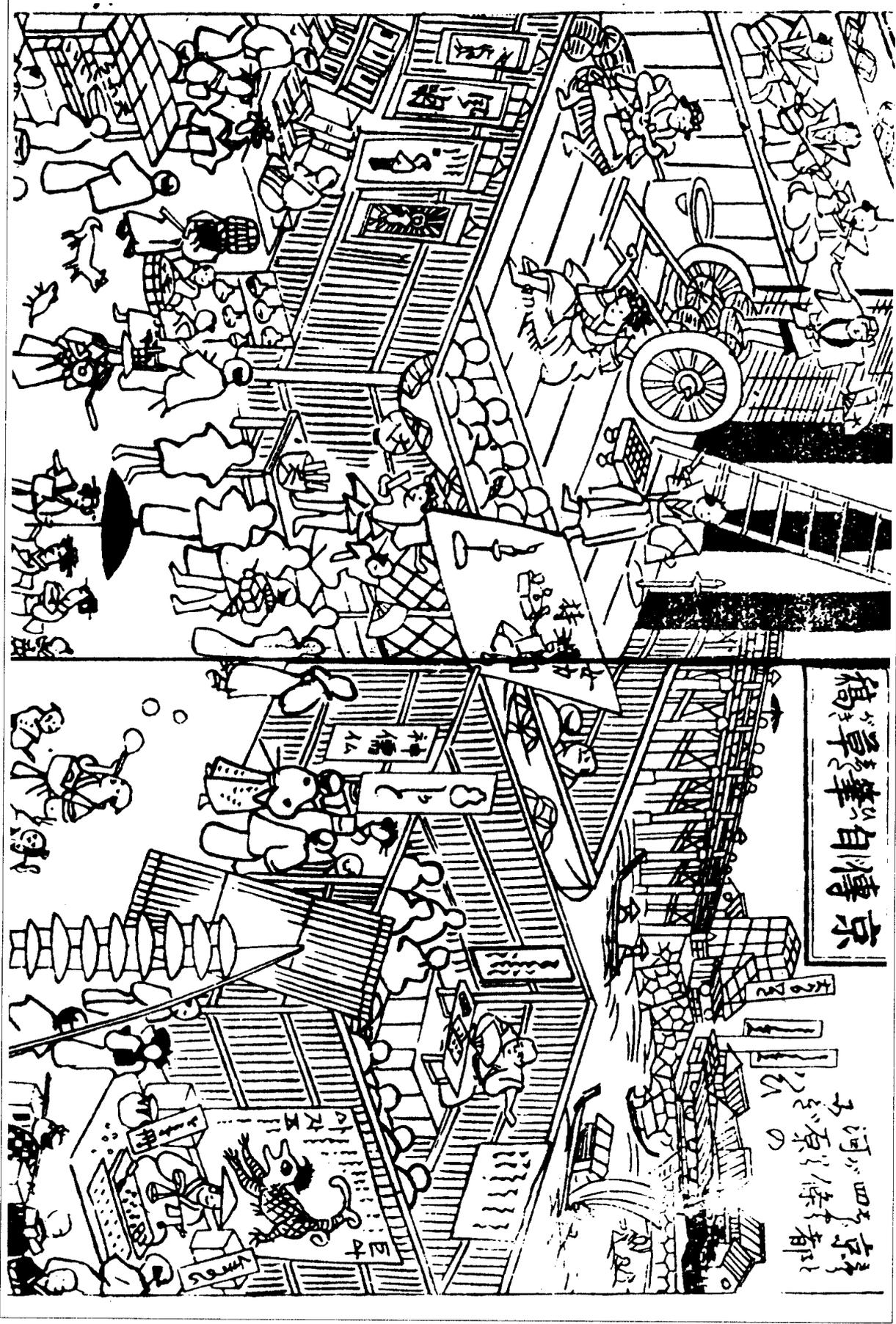
この記事の信憑性は高いとは言いが、何故ここに山東京傳の名前が出てきたであろうか。江戸の代表的戯作者・山東京傳と幕末の歌川派をリードした浮世絵師・歌川国芳。一見何のつながりもないように思われる二人ではあるが、国芳の錦絵・挿し絵本には京傳の作品に想を得たものが多く、興味深いものがある。

山東京傳は十五才で北尾重政の門下にはいり、十七才の時に北尾政演という画号で『開帳利益札遊合』（安永七・一七七八年刊 版元は不明）という黄表紙の画工として初めて世に名を出した。安永九（一七八〇）年には『娘敵討古郷錦』『米饅頭始』（共に鶴屋喜右衛門版）で戯作者としても筆を揮い始め、この後も他の作品の挿し

絵を描く一方で自画作品を発表した。天明二（一七八二）年には大田南畝の絵草紙評判記『岡目八目』（版元不明）で同年刊の京傳自画作の『御存商売物』（鶴屋喜右衛門版）がこの年の最高傑作と評され、以後、寛政の改革で手鎖の刑を受けて公に絵筆を絶つまでの間、北尾政演こと山東京傳は押しも押されぬ人気絵師であり流行作家であったのである。

歌川国芳は寛政九（一七九七）年に日本橋本銀町の紺屋に生まれ、初代歌川豊国（以下、豊国とはすべて初代を示す）の門下に入り、画工としての処女作は文化十一（一八一四）年に刊行された竹塚東子作の『御無事忠臣蔵』（岩戸屋喜三郎版）である。文化十三（一八一六）年には兄弟子である初代歌川国貞（以下、国貞とはすべて初代を示す）、同じく兄弟子の歌川国貞とともに京傳作の合巻『蝶衛曾我倂』（河原屋源七版）の挿し絵を描いている。全八巻の内、上編三巻は国貞が、下編の前二巻（十丁）を国直がそれぞれ描き、国芳は下編の五丁を描いている。この挿し絵は初期の国芳の挿し絵のなかでは上出来といえるものである。例えば、この『蝶衛曾我倂』

図版一 東京都立中央図書館蔵





図版二 国立国会図書館蔵



図版三 慶應義塾図書館蔵

に広告のある文化十二（一八一五）年刊・十返舎一九作の『於竹大日如来稚絵解』（河原屋源七版）の挿し絵は人物の姿勢がぎこちなかったり、背景との位置がちがっていなかったりと不自然な感が否めない。この二つの作品の差は国芳の習熟度のみならず、京傳が自分の作品の絵に対して細かい指示を与えていたであろうことに起因すると思われる。先に述べたように、京傳は画工出身であったので、他の戯作者に比べて作品の絵組に対するこだわりがかなりあった。図版一は京傳没後に遺稿をもとに、京傳の弟・山東京山が補筆して文政五（一八二二）年に刊行された『家桜穂穂鉢植』（和泉屋市兵衛版）に付されている京傳自筆草稿である。これから京傳が自分の作品に対して自ら細部にわたり指示をしていたことがわかると思う。

京傳は『蝶衛曾我佛』が刊行された文化十三年九月に没しているので、京傳と国芳が直接仕事をしたのは、『蝶衛曾我佛』しかない。しかし、京傳没後十八年の天保五（一八三四）年に京傳作として刊行された『復讐曲輪達引』（図版二）の挿し絵を国芳は描いている。『復讐曲輪達引』は文化五（一八〇八）年に京傳作・豊国画で刊行された『伉侠双蛺蝶』（図版三）の改題再刊本で前編が天保五年に、後編は翌天保六年に刊行され、前後編共に外題は国貞が描いている。京傳の文章と豊国の絵組はそのまま、版元はともに和泉屋市兵衛である。『伉侠双蛺蝶』は浄瑠璃の『双蝶々廓日記』の世界に敵討ちの趣向を加えた作品で京傳が得意とした演劇的合巻である。『伉侠双蛺蝶』の刊行に際しては絵師である豊国が和泉屋と京傳の橋渡しをしたと思われる。版元の和泉屋市兵衛の出版状況について堀越誠道氏は次のように考察している。

黄表紙を刊行し始めた頃の泉市は（*筆者注 和泉屋市兵衛）ま

だ専属作家はおらず、さまざまな作家の作品を一つづつ刊行する形をとっている。これは戯作家にあまりつながりを持っていなかった泉市が、なんとか良い作家を見つけようと奔走しているように思えてならない。それは泉市から作品を刊行している作家が次のような特徴を持っていることからもうかがえる。

1 長年執筆活動を中止していた作家の作品を刊行する。（通笑、好町、三和）

2 当時廃業となった伊勢治の専属作家の作品を刊行する。（七珍方宝、桜川慈悲成）

3 有名作家の門人の作品を刊行する。（芝全門、芝染交や京傳門人の馬琴）

泉市は新たに黄表紙界に加わったこともあり、さまざまな作家と交渉しようとしたに違いない。（「江戸時代の出版研究―草双紙の出版をめぐる―」より抜粋『学習院大學國語文學會誌』第三十号）

京傳は天明三・一七八三年に『草双紙年代記』を刊行して以来、馬琴の黄表紙の序文を書いた他は和泉屋とは仕事をしていない。一方の豊国は和泉屋とは親密な関係にあった。『浮世画人伝』の歌川豊国の頃には

其初めは、更に流行せず、或日豊国芝神明前の絵草紙屋和泉屋市兵衛の処に行き、己の携持たる下繪を市兵衛に渡し、筆料は取らぬ程に、これを錦絵となし、販売し呉れよと、切に依頼しければ、市兵衛甚不愜に思ひ、快く承引して、これを出版せしにその售れゆき甚よろしかりしかば、市兵衛氣を励まし随分熱心励精あるべし、その下繪は我等心引受く可しと云ひければ、豊国これに勢

図版四 『歌舞伎事典』(平凡社)より



を得て、鋭意画筆を揮ひ、必和泉屋に持行きて賣引めしより、其次次第に評判高く遂に、隆々の名を揚るに至る、されば、芝三島町より中橋通横町三笑亭可樂が隣家に、轉居して、画名の全盛を極むるに至りし時も、常に和泉屋市兵衛の恩誼を忘れしことなかりきと云へり。

とあり、同じ町内に住んでいた豊国と和泉屋の親交の深さがうかがえる。文化二年頃から京傳の作品の挿し絵は豊国の画筆に支えられるようになっており、そのついで再び和泉屋から『伧侠双蛺蝶』が刊行されたと思はれる。以後、京傳が亡くなるまでのあいだに和泉屋からは九作の合巻が刊行されている。その後の和泉屋と京傳の親交の深さを語る資料がある。曲亭馬琴の著した『伊波伝毛之記』には

文政改元の冬、畫肆甘泉堂仙鶴堂（*筆者注 版元の鶴屋喜右衛門）と相謀りて、百合女追薦の為、於回向院大施餓鬼を修行せり。其法会敢て人に知らせず。是れ書買年来京傳の著編を刊行して、頗る贏餘あり。今其徳義を思もへばなり

とある。京傳の翌年に病死した妻・百合追悼の大施餓鬼を京傳の墓所・回向院で修行したのが、和泉屋と鶴屋であり、京傳の作品で利益を挙げた恩義によるものであると馬琴は伝えている。和泉屋は前述したように京傳没後に『家桜継穂鉢植』を刊行した版元でもある。和泉屋にとって京傳がどれほど重要な人物であったかがうかがえる。

このように和泉屋は京傳とも豊国とも親交があったのだが、『復讐曲和達引』の再刊の経緯については疑問がある。まず第一に当たりを取ったというわけでもないこの『伧侠双蛺蝶』が如何なる理由で再刊されたのか。第二に『伧侠双蛺蝶』は文化五年に前後編とも

一度に刊行されたにも関わらず、『復讐曲輪達引』は二年に分けて再刊している。このことは商略的に不自然ではないかということである。

まず第一の疑問だが、再刊に際してはその時には既に京傳も豊国も亡くなっていて、版元の和泉屋市兵衛の意向により再刊されたものと推測できる。しかしながら、京傳没後十数年も経った時点で、一体いかなる動機で和泉屋は『伉侠双蛺蝶』を改題再刊しようとしたのであろうか。それについては国芳の描いた錦絵（図版四）がこたえてくれる。天保三（一八三二）年六月に江戸市村座において『双蝶々廓日記』が上演された。この興業は『歌舞伎年表』によると「當狂言」であり、五世市川高麗藏演じる放駒長吉と十二世市村羽左衛門演じる濡髪長五郎の「角力場」を国芳が描いている。この歌舞伎の人気に乗じて『復讐曲輪達引』が再刊されたと考えることもできる。

近世後期の江戸の出版界は浄瑠璃や、特に歌舞伎とは非常に密接な関係にあった。ともに庶民の娯楽であった歌舞伎と草双紙は、どちらも大衆の求めるところを察知して時代に対応することを常に求められていたのである。中山幹雄氏は

歌舞伎を描く絵師と、歌舞伎の世界の人々の関係は、実に密接なものがあった。ことに役者絵は、歌舞伎の重要な宣伝機関だった。芝居が上演されれば、江戸中の絵草紙屋の店頭には、その狂言の錦絵が飾られた。初日前にも並ぶことがあり、歌舞伎興業の宣伝の一つともなっていたわけである。

（中略）この傾向は、文化文政期以降に特に強まり、役者と歌川派の絵師、さらに歌舞伎役者も加わっての交流がさかんとなった。

（『アルバム歌舞伎十八番―豊国歌舞伎彩色』より）

と、歌舞伎役者と絵師の関係を述べている。こうした状況を示す好例として文化十二（一八一五）年に刊行された柳亭種彦作・歌川国貞画の合巻『正本製』（版元は西村屋與八）が挙げられる。この合巻は歌舞伎の脚本である「正本」風に仕立てたという意味で、内容も歌舞伎の脚本を模倣し、口絵や挿し絵に役者似顔絵を用いている。『正本製』は天保二（一八三一）年までに十二編六九巻を出すまで続くほど人気を博した。『正本製』刊行の裏には、絵師の歌川国貞が文化九・十（一八一二・一八一三）年に同じ版元の西村屋與八から刊行した森田・中村・市村三座の楽屋図が好評だったことがある。同様にして『復讐曲輪達引』が改題再刊されたことも可能だが、国芳の描いた五世市川高麗藏演じる放駒長吉と十二世市村羽左衛門演じる濡髪長五郎の「角力場」の錦絵の版元は加賀屋吉衛門であり、『復讐曲輪達引』の版元である和泉屋ではない。国芳は前述した『御無事忠臣蔵』に挿し絵を描いた他に錦絵もいくつか発表した。人気は今一つ出ず、長い不遇時代を過ごした。文政年間「狂歌師の梅屋鶴寿と知遇を得て後、梅屋の後援により加賀屋から「通俗水滸伝豪傑百八人一個」というシリーズ錦絵を発表して好評を得、人気急騰して一躍「武者絵の国芳」といわれるようになったという経緯がある。このように国芳にとって加賀屋は恩のある版元なのであるから、その加賀屋に背くようなことを国芳はできない。今一つ考えられるのは、和泉屋が加賀屋からでた国芳の錦絵を見て『正本製』の二番煎じよろしく、手持ちの『伉侠双蛺蝶』を改題して『復讐曲輪達引』として再刊しようとした際に、国芳に加賀屋とのあいだを取り持ってくれるように依頼したということである。

国芳は天保四（一八三三）年に和泉屋から刊行された桜川一声作の咄本「初昔茶番出花」の挿し絵を描いている。これが縁となったとすれば、国芳がこの『復讐曲輪達引』の刊行に深く関わっていたと考えることができる。さほど丁数の多くない合巻を二年にわたって刊行したという和泉屋の商略に関する疑問も国芳側に何らかの事情があつて挿し絵が遅れたと考えることもできる。事実文政年間から沸騰した国芳の人気は天保年間に入ってからますます高まり、自然仕事の量も多かつたにちがいない。

ここで冒頭に掲げた『浮世絵師歌川列伝』の記事をもう一度振り返ってみよう。飯島氏は「山東京傳、および五柳亭徳升の著作最もおほし」と述べているが、山東京傳作・歌川国芳画の作品は『蝶衛曾我倂』と『復讐曲輪達引』の二作のみである。一方、五柳亭徳升の挿し絵は十一作品ある（『国書総目録』による）。京傳は国芳が絵師としてデビューしてまもなく亡くなっているから、他に作品が刊行されていたとしても僅かである。にもかかわらず、飯島氏はここに京傳の名前を挙げてゐる。それは国芳の他の作品に京傳の影響があつたからではなからうか。

国芳が京傳に対して何らかの思い入れがあつたことは国芳の錦絵や合巻から読み取れる。国芳は天保十五（一八四四）年に柳下亭種員作の『滑稽絵姿合』（葛屋重三郎版 図版五）の挿し絵を描いている。これは京傳自画作の『絵兄弟』（寛政六・一七九四年刊 葛屋重三郎・鶴屋喜右衛門相版 図版六）をまねた作品で、序文に種員が

故人京傳翁の画兄弟は。寛政六年の新版にて。耕書堂（*筆者注 版元の葛屋重三郎）の大當りも。五十余年のいにしへながら。

世の人今にもてはやす。

と述べており、明らかに京傳作画の『絵兄弟』の続編であることを示している。「絵兄弟」というタイトルは錦絵では一般的なものであり、画面の左あるいは右上に描いたコマ絵と本画の見立ての面白さをねらう構図様式のこと、この京傳の見立て絵本が起源である。国芳の錦絵にも「絵兄弟やさすがた」「絵兄弟願いの額面」というタイトルのものがあり、また国芳のみならず国貞や北多川歌麿・菊川栄山など、多くの浮世絵師に「絵兄弟○○○」という作品がある。しかしながら、これらのもととなった見立て絵本の『絵兄弟』をそのまままねたものは『滑稽絵姿合』だけである。これは注目すべきことであろう。国芳の錦絵には他にも京傳作・北尾重政画の『京傳主十六利鑑』（寛政十一・一七九九年刊）を題材にした「妙でんす十六利勘」という作品がある。これは十六枚組の美人画で、『京傳主十六利鑑』をまねたコマ絵を上方に配し、画中の文章は京傳の文章をそのまま転用しているものもある。また「相馬の古内裏」と呼ばれている三枚続きの画面半分におどろおどろしい巨大な骸骨を描いた国芳の有名な錦絵に関しても、その画趣は京傳の読本『善知安方忠義伝』（文化三・一八〇年刊）に取材したものである。このように国芳の作品には京傳の影響があちらこちらにみられるのである。更に京傳が国芳に影響を与えていたということを直接語る資料として国芳自画作の『万福長者宝蔵人』（天保十三・一八四二年刊 藤岡屋彦太郎版 注一）がある。他の歌川派の絵師は専ら画業に専念していたが、国芳は鳥有散（山）人という戯作名を用いて『義仲朝日鎧』『熊谷武功軍扇』（共に天保三・一八三二年刊 鶴屋喜右衛門版）『石橋山義兵白旗』（天保五・一八三四年刊 鶴屋喜右衛門版）

『清盛一代記』（天保十・一八三九年刊 鶴屋喜右衛門版）『繪本楠一代記』（天保十一・一八四一年刊 佐野屋喜兵衛版）という合巻を自画作し発表している。近世後期になると浮世絵師が挿し絵だけでなく構想や筋を手掛けて作品を発表することは珍しいことではなく、葛飾北斎や溪斎栄泉も戯作者として作品を発表していた。この国芳自画作の『万福長者宝藏人』の序文は為永春水が書いており、つぎのようになっている。

其智には可愚には不可及とは聖人の格言。そもく是は愚たる趣向を種に、何人か作り出し、物なれども、莊子の空言、仏者の方便、用捨は具眼の看官に有なん。斯る草紙も取所ありとは本屋の商ひ口。無物喰は買人の癖。京傳好の童子氣質に呈する作者の意なるべし。應求はしがきするは御ひいきの教訓亭春水述。（句読点、波線は筆者による）

この序文から国芳が京傳風の作品をにするつもりで『万福長者宝藏人』を自画作したことは明らかである。

京傳は『手拭合』『小紋裁』『小紋新法』『小紋雅話』などの小紋意匠作品を天明から寛政にかけて著している。国芳は染め物屋の家の出であるから商売柄このような京傳の作品を目にしていたであろうし、国芳が幼年時代に読んでいた草双紙の中には当然京傳の合巻や滑稽本があったであろう。国芳の浮世絵・挿し絵に京傳の影響があるのは至極当然のことであろう。同時に京傳という戯作者の存在がどれだけ大きなものであったかということを示すことにもなるのではないだろうか。

国芳の他にも京傳の影響を受けたと思われる絵師がいる。国芳とともに幕末の歌川派をリードした初代歌川広重（以下、広重とはす

べて初代を示す）である。広重が挿し絵を描いた『狂歌やまと人物』（天明老人編 安政二・一八五五年刊）の通人の肖像の部分には「天明振の通人。京傳時代の洒落本に出る人。立斎（*筆者注 広重のこと）」

とある。『狂歌やまと人物』は全七編で最初に公家・武士・海士・隠居・辻君などさまざまな人の肖像を描いているのだが、百人に及ぶ肖像の中で絵師の広重自身がコメントを書き付けているのはこの通人の絵だけである。広重はどのような思いでここにことばを残したのか。広重も国芳と同様に京傳に対する何らかの思いがあったのではなからうか。

先にも述べたように、京傳は絵師北尾政演として、また戯作者として早くから成功し、その傍らで薬屋を営んでいた。遊廓にも通じ、遊女を二度妻に迎えた。その戯作も黄表紙・合巻・読本そして滑稽本と多数にわたって多くの作品を残している。国芳も広重も長く不遇の時代を送り、絵師として認められたのは遅かった。歌川派入門し、專業絵師として明け暮れた二人にとって京傳はその才能だけでなく生き方も含めて憧れの存在であったに違いない。専ら絵だけでなく、寡黙に見える広重が挿し絵の中に残した一言。絵だけでなく、自ら合巻を著して京傳を模した国芳。文物が爛熟した文化年間に多感な少年時代を送った彼らの作品の中には、京傳という江戸の通人への敬慕の念と憧れがかいま見られるのである。

注一 刊年は鈴木重三著『国芳』による。版元は国立国会図書館本では二十丁ウラに「江戸本郷五丁目藤岡屋慶次郎板」とあるが、天理図書館所蔵の自筆稿本の表紙に「日本橋通二丁目 忠助店 板元 藤岡屋彦太郎」とあるのでこれを採用した。

参考・引用文献

『浮世絵師歌川列伝』 飯島虚心

畝傍書房 昭和十六年

『浮世絵類考』 仲田勝之助編考

一九八二年 岩波書店

『浮世画人伝』 関根金四郎編

明治三十二年 修学堂

『歌舞伎事典』 服部幸雄・広末保他編

昭和五八年 平凡社

『歌舞伎年表』 伊原敏郎

昭和三十八年完結

『国芳』 鈴木重三 一九九二年 平凡社

『新燕石十種』 大正二年 国書刊行会

『山東京伝年譜稿』 水野稔

一九九一年 ぺりかん社

本論文は『日本古書通信』一九九三年八月号に発表した「山東京傳と歌川国芳」に加筆・増補したものである。

(しると まきこ・大学院博士課程三年)

△本誌第48号の反響▽その一

「現代日本教育の底辺から」(建石一郎氏)を読んで。

日本に「夜の勉強会」の様なことがあるのを初めて知った。社会で一人前に生活する為の最低限の教育は必要不可欠である。学歴社会の批判などは大学生に対してのものである。卒業証書が欲しいだけで大学にくる学生は私を含めて多い。学問という自由を与えられていながら怠けている。怠けているうちに苦手意識が発生し、それから逃げようとしている点でA君やB子さんと何ら変わりのない自分を見出す。いや、そう言っでは失礼だ。やる気を持ちつつもそれを生かせない彼らの境遇に対し、自分は申し訳なく思う。

細矢朋宏(四E)